

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：64303

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26284063

研究課題名(和文)南アジア諸言語の文法記述研究 - 言語類型論的視点から

研究課題名(英文)A descriptive study on grammar of South Asian languages-a typological point of view

研究代表者

長田 俊樹 (Osada, Toshiki)

総合地球環境学研究所・研究部・名誉教授

研究者番号：50260055

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、言語類型論の立場から、南アジア諸言語のうち、インド・アーリア諸語に属するベンガル語、ドラヴィダ諸語に属するテルグ語、ムンダ諸語に属するムンダ語、チベット・ビルマ諸語に属するキナウル語とネワール語の文法を、日本語によって、記述することを目指しておこなわれた。それぞれの言語についての調査と記述文法の完成に向けて研究を続けた結果、ベンガル語の記述文法はほぼ完成した。また、その他の言語については、World Atlas of Language Structure (WALS)を使って、それぞれの言語の類型論的特徴をまとめた。

研究成果の概要(英文)：This study is to describe a grammar of several languages in South Asia; e.g. Bengali from Indo-Aryan languages, Telugu from Dravidian languages, Mundari from Munda languages, and Kinauri and Newari from Tibeto-Burmese languages. These grammars will be written in Japanese and in typological perspectives. As a result of this study, grammar of Bengali is almost finished and other grammars were frame-worked according to the analysis using by the World Atlas of Language Structure (WALS)

研究分野：言語学

キーワード：言語類型論 南アジア諸言語 記述文法 Expressives

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者の長田は基盤研究(B)「南アジア諸言語の類型論的研究 - 南アジア言語領域論の再検討」の研究代表者として、平成21年度から平成24年度まで、表題にある研究をおこなったが、本研究はその延長上にある。

(2) 南アジアには、インド・アーリヤ語派、ドラヴィダ語族、ムンダ語派、チベット・ビルマ語派の4つの言語グループが共存している。そのうちの前者3つについて、共通の地域特徴を論じてきたのが南アジア言語領域論である。南アジア言語領域論は、1956年にエメノーが発表した論文(Emeneau 1956)を嚆矢とする。エメノーは、異なった語族に属する言語が、長い間の言語接触の結果、語族を超えて共通の特徴を持つに至ったとして、そういった言語接触地域を言語領域と名付け、インドが言語領域をなすことを指摘した。その後、マシカがその地域特徴を精査しまとめ(Masica 1976)、これをきっかけに南アジア言語領域論が1980年代に広く行われた。言語領域論として南アジアに限定せず、世界中の言語を視野に入れた言語類型論的研究を導入しておこなったのが今回の研究であった。

(3) 研究代表者の長田は、かねてから、南アジアの諸言語の文法的特徴を、フィールド研究による詳細なデータの記述というボトムアップのアプローチと、類型論的立場からのトップダウンのアプローチを組み合わせることに関心を持ち、類型論研究の第一人者であるオーストラリア国立大学のNicholas Evans 教授とともに共同研究を行ってきた(Evans & Osada 2005 参照)。そして、2007年5月より、長田がリーダを務める「インダス文明と環境変化」プロジェクトの中に「インダスプロジェクト言語研究会」を立ち上げ、本研究の研究分担者および連携研究者であるメンバーと定期的に研究会を開いてきた。また、その研究会の主要メンバーでもある本研究の研究代表者/分担者は、いずれも、言語グループの個別言語の記述に、20年以上取り組んでいる。

2. 研究の目的

(1) 本研究は言語類型論的視点から、南アジア諸言語の文法記述を日本語で執筆することをめざす。

(2) 南アジアはインド・アーリヤ、ドラヴィダ、ムンダ、チベット・ビルマの4つの言語グループが共存している。系統のことなる南アジアの諸言語は、言語類型論的には共通の特徴(たとえば語順や複合動詞構文など)をもっている。そこで、言語類型論の特徴に留意しながら、南アジア諸言語の文法記述をおこなう。

(3) 特定の文法理論による枠組みで、英文で書かれた文法書はこれまでも存在するが、言語類型論的視点によって書かれたもの

は、個別の文法事象を扱った論文を除けば、英語でもほとんどないに等しい。まして日本語で書かれた当該言語の文法書は皆無である。また、英語でなく日本語で執筆するのは、南アジア諸言語には、語順、複合動詞構文、オノマトペなど、日本語と類似の類型論的特徴が多く、比較言語学的に興味深い新たな視点を提供できるからである。本研究では、当該言語の文法概要をまとめ、近い将来、南アジア諸言語記述文法シリーズとして出版をめざす。

3. 研究の方法

(1) ドキュメンテーションにとって重要なものは言語記述の三点セット(文法、辞書、テキスト)といわれる。本研究では文法に重きを置く。これまでの文法記述は特定の文法理論による枠組みが使用されることが多かったが、本研究ではインドに分布する4つの言語グループに共通する類型論的特徴を軸に記述することをめざす。英語でなく日本語での記述を行うことにより、日本語との共通性が多いそうしたさまざまな類型論的特徴を、新たな角度から検討する。

(2) とりわけ、そうした類型論的特徴のひとつである Expressives の記述は、類型論的にきわめて興味深い視点を提供する。Expressives とは、従来オノマトペとか、擬態語擬音語とかで呼ばれていた語類で、南アジアには Expressives が豊富なことがこれまでよく知られている。しかし英語にはこうした単語は非常に限られており、記述に大きな障害がある。日本語を母語とする研究者・読者にとって、日本語で表現する方がずっとわかりやすく興味深い比較が行えるという利点がある。

(3) 南アジア諸言語を類型論的視点から記述することに関しては、すでに出版された World Atlas of Language Structure(WALS)によってその道筋が示されている。本研究ではこの WALS に示されたデータを積極的に活用したい。また、研究代表者である長田はオーストラリア国立大学のニコラス・エヴァンズとの間で、類型論的立場からの長年にわたる共同研究の実績があり、また研究分担者である大西も、同大学の言語類型論センターでの研究の実績があり、長田とは、世界の言語を類型論的立場から論じたニコラス・エヴァンズの主著『危機言語』(2013)の共同翻訳作業をインダスプロジェクトの中で行った。こうした枠組みに基づき、他の研究分担者も、下に述べるように、「インダスプロジェクト言語研究会」などにおいて、それぞれの言語の文法現象の類型論的分析の発表と執筆を積み重ねてきている。

4. 研究成果

(1) まず、代表者の長田によるムンダ語文法、分担者の大西によるベンガル語文法、見玉によるテルグ語文法、高橋によるキナウル

語文法、桐生によるネワール語文法のうち、大西によるベンガル語文法は、全 16 章のうち 4 分の 3 にあたる 12 章(200 頁あまり)が仕上がっており、本年度中に完成の目処が立っている。完成後は科研成果公開促進費などに応募して、成果本として、出版する予定である。また、ベンガル語の Expressives についても、ベンガル語話者のドットとの共著で、言語記述論集に論文(2016)を発表した。

(2) 代表者の長田は類型論的特徴の中で、あまりにも心理的要素が強く、これまで顧みられなかった Expressives について、Mundari Expressives Dictionary を作成し、現在、ほぼ完成している。この辞書はムンダ語話者からムンダ語の Expressives を聞き取り、先ず日本語でその意味を記述し、例文とともに、約 1000 語の Expressives を扱っている。英語については、京都大学の Nathan Badenoch 准教授に協力を得て、ムンダ語 - 日本語 - 英語の三言語による Expressives 辞典を作成している。現在はまだ索引をつくっていないが、日本語のオノマトペによる索引も作成する予定である。また、ベンガル語、テルグ語にくわえて、インド・アーリヤ諸語のヒンディー語、ドラヴィダ諸語のクルフ語との比較対照も予定している。なお、カンボジアでおこなわれたオーストラリア国際言語学会(2015年7月)やインドでおこなわれたムンダ語国際セミナー(2017年3月)でその成果の一部を発表した。

(3) この Expressives 辞典作成にあたり、オーストラリア国立大学のニコラス・エヴァンズ教授からもいろいろと助言をいただいた。エヴァンズ教授のお招きで、2016年11月から1ヶ月半、オーストラリア国立大学に滞在して、Expressives の研究をおこなった。その際、エヴァンズ教授から紹介された大学生とともに、Expressives がどんな動作や表情と結びついているのかを記録・分析する、ビデオを使った研究を並行しておこなった。この研究は今後も継続しておこなう。

(4) 研究分担者の高橋はキナウル語担当であるが、キナウル語の使役表現について、類型論の立場から発表をおこない、「キナウル語の名詞句構造と修飾構造」について、京都大学人文科学研究所から出版された論文集に論文を掲載した。類型論的視点を統合すべく、現在、文法記述をめざしている最中である。なお、チベット語文法研究を武内と共著として出版しているが、その際に類型論的視点を考慮しつつ、執筆をおこなった。

(5) 研究分担者の児玉はテルグ語の担当であるが、WALS に照らし合わせて、テルグ語の類型論的特徴をまとめて、科研の研究会で発表をおこなった。また、テルグ語の Expressives についても、われわれの研究会で発表した。現在、類型論的枠組みの中で、文法をある程度まとめた段階である。

(6) 研究分担者の桐生はネワール語担当であるが、言語類型的な観点からネワール語の

特徴を探るために、これまでにまとめたネワール語の文法的特徴を整理し、WALS の言語類型のタイプを指標としてネワール語の言語現象を分析した。WALS の類型タイプを整理することで、自身の研究及び先行研究では言及されていないか十分に記述がなされていない現象を拾い上げ、現地調査においてデータを集め、詳細を分析した。とくに、名詞化タイプについては、これまでの先行研究を踏まえつつ、記述の精緻化を図り、英語論文と日本語論文の二篇を国際的な論文集に発表した。

(7) 本研究は南アジア諸言語を対象としている。そこで、南アジアの言語研究者にも積極的に発信して行かなくてはならない。われわれはアメリカのハーヴァード大学から出版した Language Atlas of South Asia のインド版をインドのマノハル出版社から出版した。これが南アジアの諸言語分布地図のスタンダードとして、南アジア諸国で認知されることを願ってやまない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

児玉望「アクセント核はどこから来たか」『ありあけ 熊本大学言語学論集』 Vol.16 2017, pp.1-34 紀要論文

大西正幸、ドゥルガ・ポド・ドット「ベンガル語の expressives をめぐって」『言語記述論集』査読有、第 8 号、2016, pp45-84。

児玉望「天草本渡二型アクセント：自発談話音声資料の分析」『ありあけ 熊本大学言語学論集』 Vol.15 2016, p.59-82 紀要論文

児玉望「隠岐三型アクセントの再検討」『ありあけ 熊本大学言語学論集』 Vol.14 2015 p.1-36 紀要論文

[学会発表](計 4件)

OSADA, Toshiki, Expressives in Mundari, International Seminar of Munda linguistics, 2017年3月17日、デカン大学。

Kiryu, Kazuyuki, Grammaticalization of nominalizer constructions in Tibeto-Burman languages, NINJAL International Symposium: Grammaticalization in Japanese and Across Languages, 2016年7月3日、国立国語研究所

OSADA, Toshiki, Baby talk in Mundari, Sixth International Conference on Austroasiatic Linguistics, 2015年7月31日、クメール研究所。

高橋慶治「キナウル語の使役表現」TB 諸語における「使役文」第2回研究会、2015年1月25日、京都大学人文科学研究所。

[図書](計 7件)

桐生和幸（印刷中）「ネワール語の名詞化辞=guの意味拡張 16世紀から現代における文法化と（間）主観的意味への変化」、ひつじ書房、高田博行・小野寺典子・青木博史（編）『歴史語用論の方法』。

Kiryu, Kazuyuki (in press) Chapter 14 Newar. Mouton de Gruyter, In Tasaku Tsunoda (ed.) *Levels in Clause Linkage: A Crosslinguistic Survey* pp.525-570.

OSADA Toshiki and ONISHI Masayuki, Manohar Publications, *Language Atlas of South Asia*, 2017, 164

タラシヨンコル・ボンドパツダエ著、大西正幸訳・解説、めこん社、『船頭タリニ』、2016、306

武内紹人・高橋慶治、神戸市外国語大学外国語学研究所、『チベット語文法研究』、2016、110

高橋慶治「キナウル語の名詞句構造と修飾構造」池田巧（編）『シナ=チベット系諸言語の文法現象 1: 名詞句の構造』京都大学人文科学研究所、2016、pp. 155-70。

OSADA, Toshiki, Rihn's Indus Project (2007-2012), In A. Didier, B. Mutin (eds.) *Man and Environment in Prehistoric and Protohistoric South Asia: New Perspectives*. Turnhout. 2015, pp.211-220.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長田 俊樹 (OSADA Toshiki)

総合地球環境学研究所・研究部・名誉教授

研究者番号：5 0 2 6 0 0 5 5

(2) 研究分担者

大西 正幸 (ONISHI Masayuki)

同志社大学・研究部・嘱託研究員

研究者番号：1 0 2 9 9 7 1 1

高橋 慶治 (TAKAHASHI Yoshiharu)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：2 0 2 5 2 4 0 5

児玉望 (KODAMA Nozomi)

熊本大学・文学部・教授

研究者番号：6 0 2 2 5 4 5 6

桐生和幸 (KIRYU Kazuyuki)

美作大学・生活科学部・教授

研究者番号：3 0 3 1 0 8 2 4